思考の癖と問いの再生成

判断過程の記述体系と前知U理論に接続する検証計画

前田英志 | FIN FHI Research Institute | 2026年9月28日 | Working Paper No.003・未査読

要旨

判断の偏りを効果名の一覧だけで理解すると、同じ行動を生む異なる理由を取り違える。本稿は、既存研究の現象を記録する「現象台帳」、問いの形成から結果の解釈までを追う「判断過程」、前知的違和感を保持して問いを作り直す「介入」の三層を提案する。バンドワゴン、確証バイアス、アンカリングを試作事例とし、観察可能な行動と原因の推定を分ける。前知U理論 Working Paper No.001 の五段階とBAOSの六段階対話を接続するが、既存の心理学的効果を同理論の実証根拠とはみなさない。最後に、現象ごとの機構を確かめる実験と、BAOS対話の効果・負担を測る研究を区別して設計する。本稿は結果を報告せず、反証可能な研究計画を示す。

キーワード：判断、認知バイアス、社会的影響、問題設定、前知的違和感、問いの再生成、AI対話

1 研究課題と範囲

投資、仕事、生活、AIとの対話では、人は事実だけで選んでいない。目についた情報、比較の基準、他者の行動、最初の問いによって、同じ情報の意味が変わる。本稿が問うのは、①何が判断に入り、②どの段階で作用し、③本人がその作用に気づいたとき問いをどう扱えるか、である。「思考の癖」は人格の欠点や診断名ではなく、一定の条件で観察される判断の傾向を指す。

本稿の網羅性は収録件数では測らない。対象文献の検索式、データベース、採否理由、最終検索日、未調査領域、更新履歴を台帳として公開して初めて「継続的な目録」と呼ぶ。今回の分類表と三カードは試作であり、全現象の系統的レビューでも、各効果の再現性の判定でもない。

既存の前知U理論は、明示された問題設定と知覚した状況の不一致が、問いになる前に判断を弱く止める主観的感覚を「前知的違和感」と定義する［1］。本稿の関心は、その停止がどの判断過程で起こり、どのような対話で検討可能になるかにある。違和感は正しさの証明ではなく、偏見、疲れ、不安、自己利益からも生じる［1］。

2 三層と分析単位

層	対象	記録するもの	言えないこと
現象台帳	既存研究の効果・概念	定義、課題、反復研究、異説、適用範囲	名前だけから個人の原因を断定すること
判断過程	一件の判断	問いの出所、初期判断、情報、変化、結果	結果だけで過程の善し悪しを決めること
問いの再生成	違和感と対話	停止、保持、前提点検、新しい問い、再判断	対話しただけで判断が改善したと結論すること

分析単位は「人」ではなく「人×課題×時点」の判断エピソードとする。同じ人の違う場面を比べ、個人差と状況の効果を分離する。観察された選択の変化、本人が述べた理由、研究者が推定する機構は別欄に置く。

2.1 判断過程の作業モデル

課題と問いの提示 → 注意の配分 → 情報の探索と想起 → 解釈・前提設定 → 予測と価値づけ → 選択と行動 → 結果の解釈 → 前提と問いの更新。これはデータ取得の順序を示す作業モデルであり、普遍的な認知過程を確立した主張ではない。感情、権力関係、社会的情報、AI出力は複数の位置に入る。違和感の発生位置も固定しない。

一件の最小記録は、課題、初期の問いと出所、初期判断と確信度、停止した箇所、検討した証拠、他者・AIの情報、保留または変更した前提、改訂した問い、最終判断、後日の結果の十欄とする。どの欄も空白を許し、「違和感なし」「問いを維持」「未解決」を有効な状態として記録する。

2.2 前知U理論との接続

Working Paper No.001 の正式な五段階は「違和感の発生／保持／前提の再点検／問いの再生成／判断」である［1］。本稿の判断過程は、これを置き換える段階名ではなく、違和感がどこで生じたかを特定する座標である。BAOS の既存六段階は「停止点／原形保存／不一致探索／仮表現／問い生成／本人確認」であり、原稿の七記録項目は「当初テーマ／停止点／前知の断片／不一致の組／仮表現／再生成された問い／残っている違和感」である［1］。本稿の十欄を実装する場合には、これらの欄との対応表を作り、既存データを上書きしない。Before/After の実際の保存仕様は未確認である。

3 現象台帳の設計

主な入口	初期候補	観察したい問い
注意	顕著性、利用可能性	見なかった情報は何か
記憶	後知恵、選択支持的記憶	判断前に何を知っていたか
比較	アンカリング、フレーミング	起点と表現を誰が決めたか
信念	確証過程、動機づけられた推論	反証になり得るものは何か
社会	同調、人気への追従、情報カスケード	多数の根拠は独立しているか
予測	基準率の無視、過信、計画錯誤	比較集団と幅を示したか
価値と時間	損失回避、サンクコスト、現在バイアス	過去の投下とこれからの価値を分けたか
事後評価	結果バイアス、自己奉仕的帰属	決定当時の情報と運を分けたか
AI利用	出力への過度な追従、検証の省略	自分の初期判断と出典を残したか

これは複数タグを許す索引であり、各行を同一の心理機構とみなさない。AIの行は既存の単一「バイアス名」ではない。ヒューリスティクスは環境に適合すれば有益にもなり得る［5］。

一カードには、標準名と同義語、操作的定義、原著・レビュー・異説、研究課題と対象、判断過程上の位置、引き金、観察指標、役立つ条件、害を生む条件、前知Uとの仮説上の関係、BAOSでの介入案と失敗指標、採録日・見直し日を載せる。証拠等級A〜Dは本研究の規則を事前公開してから付与し、今回は付与しない。文献を「確認した」と効果の「外的妥当性がある」を同義にしない。

4 三つの試作カード

S01 人気への追従と近接する社会的影響

観察対象。 多数派の支持情報を与える前後で、本人の評価・選択・確信度がどう変わるか。多数と同じ選択をした事実だけでは判定しない。集団から外れたくない同調と、先行者の行動を情報とみなすカスケードは別の仮説とする［6］。

実験案。 同じ経営案件で初期判断を保存し、支持率の高低と支持者の根拠の独立性を独立に無作為化する。支持率の効果、独立性開示による再判断を比べる。専門家の多数意見が信頼できる場合は追従が合理的であり得る。BAOS案は「各人は別々の情報から判断しましたか」。この質問で独立性の確認が増えない、または妥当な多数派情報まで捨てるなら、介入は失敗の可能性がある。

I01 確証過程

観察対象。 既存仮説に合う情報を選ぶ「探索」、同じ情報を違って読む「解釈」、後から思い出す「記憶」、反対証拠後の「更新」を分ける［7, 8］。反証を選ばなかったことだけで偏りと判定しない。

実験案。 AIに相談する前に仮説と棄却条件を記録する。質を揃えた賛否の資料の閲覧順、信念の変化、どの反証が有効かを観察する。BAOS案は「何が分かればこの考えを変えますか」。問いを改めたように見えても、有力な反証を避け続けるなら効果を支持しない。

C01 アンカリング

観察対象。 外から示された高値・低値、または本人が思い出した値の後の数量推定。推定が寄っただけで「調整不足」が機構だと断定しない［2, 9］。

実験案。 同一案件に高い数値／低い数値／数値なしを割り付け、独立した基準で推定し直す。起点の出所と妥当性も記録する。BAOS案は「この数値は誰が、何の根拠で置きましたか」。起点から離れることそのものではなく、事前に定めた妥当な基準への接近を評価する。

5 仮説と二つの検証研究

本稿の仮説は先行研究の確定結果ではない。H1：違和感を短く記録する条件は即答条件より、隠れた前提の明示を増やす。H2：反論を一つ求める条件より、仮表現と問いの再生成を行う条件は、別課題での問いの適合性を高める。H3：AI回答より先に本人の初期判断を記録すると、意図的に混ぜたAI誤答への追従が減る。H4：問いの変更回数ではなく、判断に必要な新情報を特定できる変更が後続の判断の質を予測する。いずれも逆効果、無効果、疲労による離脱を許容する。

研究A：現象の識別。 S01、I01、C01それぞれの操作を事前登録し、異なる機構の識別可能性を調べる。人気表示と根拠の独立性、賛否の資料、数値起点を別々に操作し、操作チェックを行う。同一人物に複数課題を出す場合は

順番を入れ替え、学習・持ち越しを考慮する。課題は実際の投資売買を伴わない。まず形成的試行で課題の理解と操作の効き具合を点検し、修正後に確認的研究を行う。

研究B：対話の効果。 成人を対象に、A＝初期判断記録後の通常AI助言、B＝同記録後の現行BAOS、C＝同記録後の前知的違和感を保持・仮表現・問いの再生成を促す試作フローへ無作為割付する。CとBの差が新しい追加要素の効果、BとAの差が既存フローとの差に対応する。ただし「既存フロー」に同じ要素が含まれるならコントラストを再設計する。対話時間、使用モデル、指示文、課題を記録し、開発者と採点者を分ける。質問疲れを避けるため一度に一問、本人の言葉を残す、回答終了と未解決を許す［1］。

主評価。 原稿段階では、AIなしで約一週間後に取り組む新しい課題に対し、本人が書く「問いの適合性」を主評価とする。課題固有の判断の質は重要な別評価として置く。両者を単一の主指標に混ぜない。事前ルーブリックは「状況への適合、前提点検、次に確かめられる具体性、本人による説明」を各0〜2点とし、試行後に採点例と一致度を報告する。AI文の転載は本人の再生成として採点しない。副次評価は反証の特定、判断の質、確信度の較正、所要時間、疲労、離脱、本人がなお違和感を持つ割合とする。

解析と反証条件。 主解析は割付通りの群で事前値を調整した群間差と信頼区間を示し、欠測と離脱を明示する。必要人数は実務上意味のある差と予備データの変動から計算する。CがBと同等か劣る、問いは美しくなっても新課題や判断が改善しない、本人の説明が弱い、離脱が増える、という結果も報告する。媒介分析は探索的とし、問いの改善が判断改善の原因だったと性急に断定しない。

研究利用への任意同意はサービス利用と分け、第三者情報を除去し、保存期間と削除手順を定める。未成年への実験は別計画とする。開発者が研究者を兼ねる利益相反を開示する。BAOS現行画面とBefore/Afterの実データ項目は未確認のため、取得可能性を監査してから登録する。既存の Working Paper No.002「前知対話の効果検証」素案［10］とは主評価や群設計の重複があるため、研究番号・課題群・採点規則を調整する。

6 次の改訂と限界

最初に文献検索と三カードのレビューを完了し、検索日と未調査領域を公開する。次にBAOS画面を監査し、七項目と本稿十欄の対応を確認する。その後、課題・対話・採点を少人数で試し、事前登録して比較研究に進む。30項目の台帳は目標であって、本稿で調査済みと主張しない。前知U理論の概念的独自性は既存論文［1］の範囲で論じ、本稿の分類表や介入が有効かどうかは今後のデータで決める。

参考文献

[1] 前田英志（2026）「正しい分析は なぜ正しい問いを保証しないのか」FIN FHI Research Institute Working Paper No.001、特に2.2、4、6.4節。既存の館内版。

[2] Tversky, A. & Kahneman, D. (1974). Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases. *Science*, 185, 1124–1131. https://doi.org/10.1126/science.185.4157.1124

[3] Tversky, A. & Kahneman, D. (1981). The Framing of Decisions and the Psychology of Choice. *Science*, 211, 453–458. https://doi.org/10.1126/science.7455683

[4] Kunda, Z. (1990). The Case for Motivated Reasoning. *Psychological Bulletin*, 108, 480–498. https://doi.org/10.1037/0033-2909.108.3.480

[5] Gigerenzer, G. (2021). Embodied Heuristics. *Frontiers in Psychology*, 12, 711289. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.711289

[6] Bikhchandani, S., Hirshleifer, D., Tamuz, O. & Welch, I. (2021). Information Cascades and Social Learning. NBER Working Paper 28887. https://www.nber.org/papers/w28887

[7] Wason, P. C. (1960). On the failure to eliminate hypotheses in a conceptual task. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 12, 129–140. https://doi.org/10.1080/17470216008416717

[8] Nickerson, R. S. (1998). Confirmation Bias: A Ubiquitous Phenomenon in Many Guises. *Review of General Psychology*, 2, 175–220. https://doi.org/10.1037/1089-2680.2.2.175

[9] Epley, N. & Gilovich, T. (2006). The Anchoring-and-Adjustment Heuristic: Why the Adjustments Are Insufficient. *Psychological Science*, 17, 311–318. https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2006.01704.x

[10] 前田英志（2026）「前知的違和感は対話によって本人の問いになるか」Working Paper No.002 素案。館内版、未刊。

[11] Lee, H.-P. et al. (2025). The Impact of Generative AI on Critical Thinking: Self-Reported Reductions in Cognitive Effort and Confidence Effects From a Survey of Knowledge Workers. *CHI 2025*. https://doi.org/10.1145/3706598.3713778 （319人の自己報告調査であり、BAOSの因果効果を示さない。）